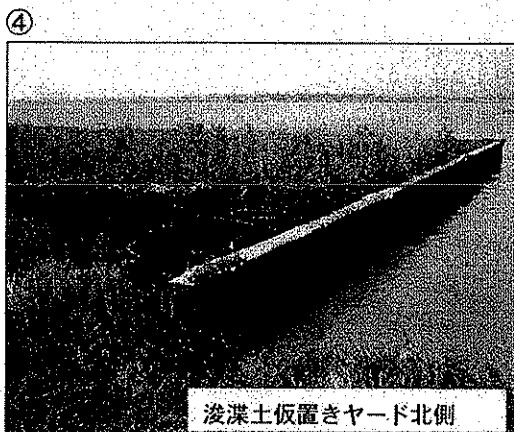
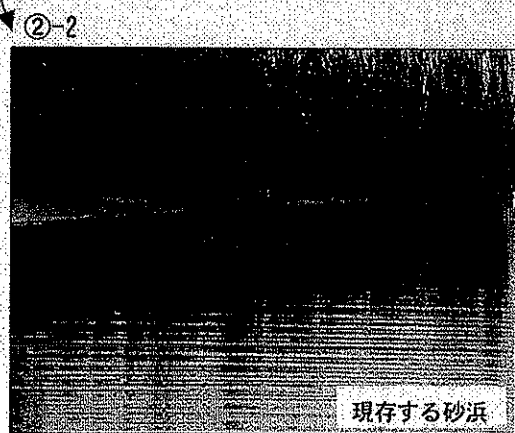
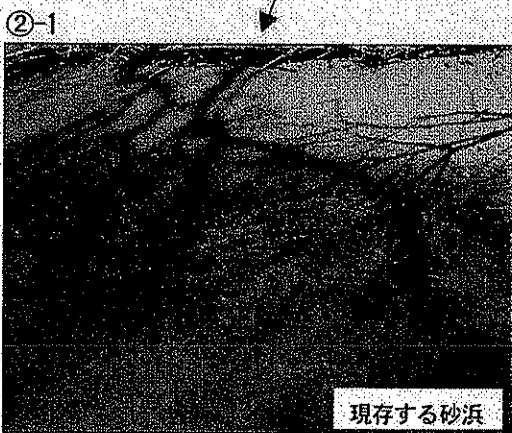
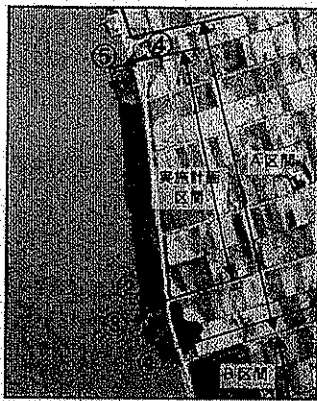


OA 区間の現況写真



※写真①、②は、平成 18 年 1 月 12 日、写真③～⑤は平成 16 年 5 月 25 日撮影。

②現在の植生

ヤード内は相観的にタチヤナギ林であるが、タチヤナギのほかカワヤナギ・アカメヤナギ・ネコヤナギ・イヌコリヤナギ・オノエヤナギを見出すことができる。ヤナギによる被陰と増水時の冠水のため、ヤナギ林内に下草層は発達していない。

ヤナギを欠く部分は相観的にセイタカアワダチソウ群落で、ヘクソカズラ・イシミカワなど蔓草が繁茂して群落表層を覆っている。06年7月現在、ヤード内では77種の植物種が確認された。その中には、環境省レッドデータブックで絶滅危惧IB類とされるジョウロウスゲをはじめ、シロバナサクラタデ、ドクゼリ、ウキヤガラなどの湿地性の植物が含まれていた。一方、セイタカアワダチソウ、ヒメムカシヨモギなどの外来種や耕地路傍雑草も多く含まれていた。

矢板列の湖面側にはヨシ先駆群落がわずかに残る。ヤードの東南は築堤以前からの堤外地(約0.3ha)に接しており、カサスゲ・オギ・シロネなどの湿生植物はこの残存植生内のみみられヤード内にはない。(P10: A区間現況図)

A区間(堤防法面を除く)の現存植物(H18,7月調査)は以下のとおりである。

(赤字は在来の水生・湿生植物、ほかは陸生の植物および外来種)

木本	タチヤナギ・アカメヤナギ・カワヤナギ・ネコヤナギ・ジャヤナギ・オノエヤナギ・ムクノキ・クワ
耕地・路傍雑草	ツルマメ・ツユクサ・セイタカアワダチソウ・オオイヌタデ・メヒシバ・ヒメムカシヨモギ・オオアレチノギク・ダンドボロギク・アキノノゲシ・ハルノノゲシ・ヌカキビ・ヨモギ・ウシハコベ・ヒナタイノコズチ・スベリヒユ・ホソムギ・メマツヨイグサ・オニウシノケグサ・カタハミ・ガガイモ・キツネノマゴ・アオカモジグサ・アレチギンギン・ヨウシュヤマゴボウ・ヒメジョオン・シロザ・フキ・メドハギ・ヤハズソウ・チガヤ・ネコハギ・ナガハグサ・ホソムギ・ウラジロチチコグサ・ナギナタガヤ・ヒロハギンギシ・カキドオシ・エノコログサ・アメリカイヌホオズキ・イヌムギ・ヤブジラミ・エノキグサ・ホトケノザ・オオイヌノフグリ・ノミノフスマ・ヘビノネゴザ
蔓・匍匐植物	ヘクソカズラ・ノイバラ・ツルウメモドキ・イシミカワ・カナムグラ・ノブドウ・スズメウリ・アオツツラフジ・カラスウリ・スイカズラ
水辺の植物	アメリカセンダングサ・コセンダングサ・サデクサ・カズノコグサ・シロバナサクラタデ・ミコシガヤ・ジョウロウスゲ・ウキヤガラ・ヨシ・アゼナルコスゲ・イ・マコモ・ドクゼリ・ヒメガマ・クサヨシ(点在し生育は不良で、抽水・湿生群落の形成には至っていない)。
東南端の堤外地だけに見られる植物	ハマスゲ・ニワゼキショウ・カゼクサ・ミツバアケビ・クリ・シバ・スギナ・クサイ・イチゴツナギ・オオバコ・オギ・アシボソ・イヌコリヤナギ・アキノウナギツカミ・ウシノシッペイ・カサスゲ・アズマネザサ・センニンソウ・シロネ・ツルマンネングサ・ブタクサ・ミゾソバ・カントウヨメナ・ヒメジソ

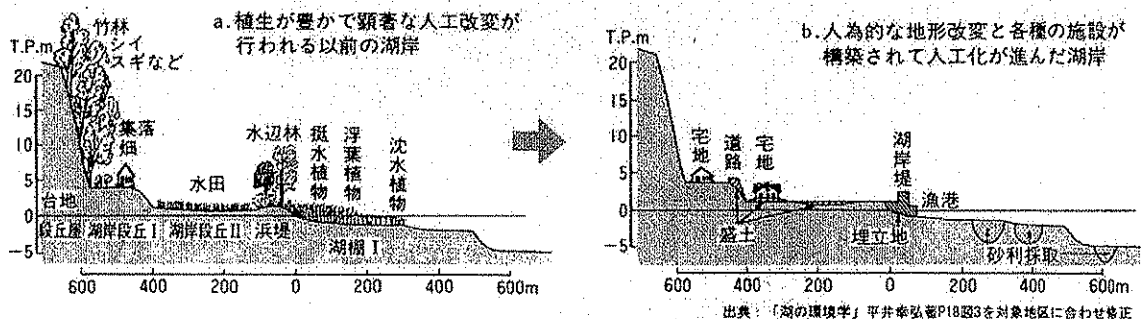
③A区間の来歴

A区間は土浦市(旧新治郡上大津村)大字田の地先にあたる。田村は集落前の広い水田地帯から名づけられたといわれるように、湖岸低地は古くから開田されて、江戸末期のA区間は水田地帯に続くヤワラ(谷原、湖岸の葦原)であった。水田の先に土手道があって、その先は見取り場、さらに先がヤワラとなっていた。ヤワラには4本の悪水川(排水路)があったという(P14:田村絵図)。明治38年測量の地形図を見ると、土手道は田村境川から田村池(B地区)まで続いていたことがわかる。(P15:5万分1地形図「土浦」、M38測S4修測)。

大正から昭和のはじめにかけて、湖岸各地で部分的な波除堤が築造された。A地区では戦前から現在の位置に堤防が築造されていたことが、昭和22年地形図(P15:5万分1地形図「土浦」、応急修正版)から読み取れる。したがって、堤防による湖と陸の連続性の遮断は、かなり古くからのことといえよう。この堤防は霞ヶ浦開発事業により補強され、昭和48年3月に完成して連続堤となった。

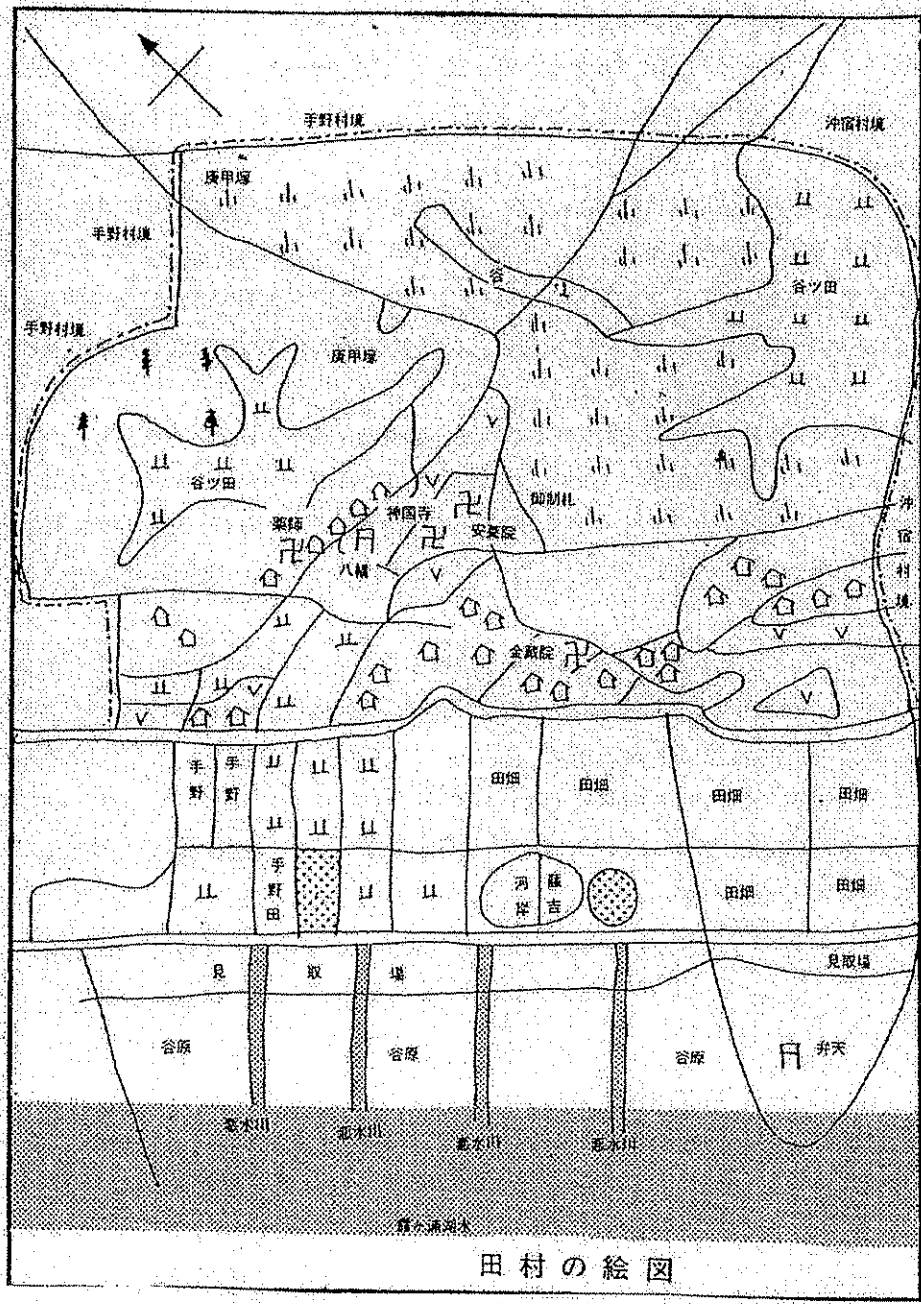
昭和47年作成の植生図(P16:霞ヶ浦生物調査報告書植生図S47)から、その頃のA地区の湖岸には幅約50m-100mの抽水植生帯と幅約200mに及ぶ沈水植物帯が存在したことがわかる。現在(P16:河川水辺の国勢調査植生図H14)では、その後の地形改変や施設設備、湖水透明度の低下などにより沈水植生帯は失われ、抽水植生帯はきわめて衰退している。(下図参照)

昭和53年、霞ヶ浦土浦奥部の湖底浚渫にあたって、旧建設省霞ヶ浦工事事務所は浚渫現場に近く、平時時には冠水しない、ある程度の規模を有する堤外地としてA地区を選び、ここに浚渫土仮置きヤードを設置した。ヤードは浚渫した底泥をいったん運び込み、脱水乾燥してから搬出するための施設である。このヤードは平成5年にその役割を終えたが、浚渫土を残して放置されたため、その後約15年間にわたる植生遷移の結果、現在ではほとんどヤナギ林の姿を呈している。



霞ヶ浦における湖岸地形の変化

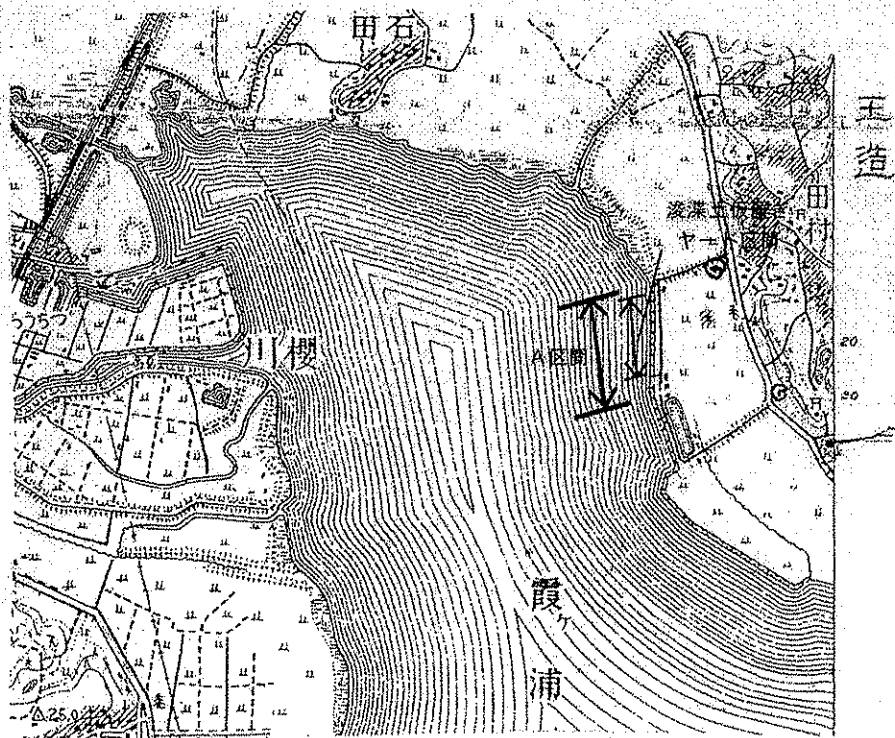
註 見取り場: 新田を開発しても土地が劣悪で通常の年貢を納めるだけの収穫が見込めないことから、見取り(現地検査)によって軽い年貢を課すことにした耕地。



田村絵図写し (1836年7月)
 永山正「土浦町内誌」、土浦市教育委員会 (平成元年)、P221



1/50,000 地形図「土浦」(明治 38 年測量昭和 4 年修正測量)



1/50,000 地形図「土浦」応急修正版(昭和 22 年 11 月撮影空中写真平面図化)